

3月号パラパニュース

特定非営利活動法人日本パラ・パワーリフティング連盟

事務局：〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2-4F

電話：03-6229-5423、FAX：03-6229-5420

メール：jppf.jimu@gmail.com

ホームページ：http://jppf.jp/

□ タレント発掘、何を基準に？

JOCがずっと行ってきた、才能のある選手の発掘、という行事がある。たとえばオリンピック種目のウェイトリフティングでは、この年代で垂直飛びが何センチだと、将来の伸び代は、これくらい、ということまで、統計的に出しているそうだ。さすがに100年の歴史を誇るウェイトリフティングだ。そういう、タレントの発掘から、ジュニア育成などを経て、フィギアスケートや体操、卓球、水泳……など、数多くの選手育成が成功し、オリンピックで活躍している。

一方、パラリンピックでは、東京パラリンピックがやって来る！ということで、やっと、JPCやスポーツ庁、などが、新しい選手を発掘しようという事業が始まった。パラパワーリフティングでは、とりあえず目安として、メディسنボールがどれくらい飛ぶか、を、発掘の目安としている。

理由は、JPCのアスリートチェックで、メディسنボール投げの結果、一番よく飛んだのは、男女ともパラ・パワーリフティングの選手だったからだ。他にも、発掘の目安となる種目があるかもしれないので、引き続き、模索は続けたいと思う。さて、今回京都府の新聞に大きく掲載されたのは、全国の都道府県体協が実施するタレント発掘事業に参加し、その選手に対して育成事業を開始しているフェンシングとパラ・パワーリフティングのフォーラムが開催された。この2種目は、京都府に合宿所を持っている。フォーラムでは、なぜ、選手発掘に応募したか、と言う選手の気持ちを引き出し、競技団体からは、どのように、これから育成していくのか、という、方針が説明され、それに伴う問題点もあぶりだされた。パラ・パワーリフティングからは、肉体的才能の発掘は、数値的なものである程度目安があるが、その人が、同じ競技を長年持続的に追及できる正確か、とか、メンタル的に前向きで常に積極的に記録の向上を目指していけるのか、などの、精神要素をどのように見極めていくのか、といった、課題が討論された。

メンタル適性どう見抜く ジュニア発掘、五輪向け討論：京都新聞

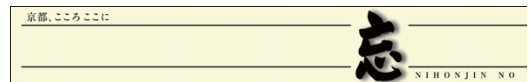
京都新聞

平成30年1月30日
14時8分 更新

天気予報
1/30 15時 21時
京都府北部
京都府南部
滋賀県北部
滋賀県南部
天気予報

京都新聞に
日経テレコン

京都新聞
京都府
滋賀県
ここを詳しく



出版案内 福祉事業団

トップ 滋賀ニュース 地域ニュース 政治・社会 スポーツ 経済 株・為替 教育・大学 雑

メンタル適性どう見抜く ジュニア発掘、五輪向け討論

2020年の東京五輪・パラリンピックに向けて有望選手を発掘する国の「ジャパン・ライジング・スター・プロジェクト」にちなんで京都府フォーラムが28日、宇治市内であった。体力測定で見えないジュニアやパラアスリートの「心理的才能」をどう見抜くかなど、現場の課題を関係者らが報告した。



アスリートの才能発掘や育成についての課題を語るパネリストたち(宇治市・太陽が丘多目的ジム)

同プロジェクトは本年度にスタート。府は車いすフェンシングとパラ・パワーリフティングの拠点到指定されており、事業委託を受けた府体協が初めてフォーラムを催した。

パネル討論では、今秋に京都を含む全国各地で実施した同プロジェクトの測定会について、日本パラ・パワーリフティング連盟の吉田進理事長(京大出)が「上半身のパワーや骨格を見ることはできるが、メンタルの適性を見極めるのが難しい」と問題提起。長年カヌーのジュニア指導に携わる府スポーツ振興課の坂東美紀担当課長は「前向きに指導を受けた」といった『コーチャビリティ』が大事、と、選手のやる気をポイントに挙げた。

同プロジェクトで選ばれた車いすフェンシングの中河貴由樹選手(38)＝京都市右京区＝とパラ・パワーリフティングの森崎可林選手(15)＝守山市＝もパネリストとして出席。「パラリンピックを目指して頑張りたい」と決意を示し、来場者約70人を前に競技のデモンストレーションも行った。

□ パラ・パワーリフティング、第一号メダリスト？！

2014年のある日、

「僕の教え子が1964年の東京パラリンピックに出場したんだよ。」

と、パラ・パワーリフティング連盟の前名誉会長であり、長年ボディビル界に君臨してこられた、故玉利斎氏が言われた。そこで、パラ・パワーの始まりを知りたかった私は、ご無理を申し上げて、玉利氏のお友達で、日本障がい者スポーツ協会前会長の北郷勲夫氏を、日本障がい者スポーツ協会に訪ね、1964年当時のアルバムを見せていただいた。そこで、パラ・パワーリフティングが「ウェイトリフティング」という名前で、1964年の東京大会で第一回の障がい者ベンチプレス競技が行われたことがわかったが、残念ながら、日本人選手が出場していたという事実を見つけることが出来なかった。

それが、本年2月、「江戸川区の広報に、パラ・パワーリフティングは1968年以来、メダルを取っていない」という記事がでている、と、NHKの番組制作をしておられるアズマックス社の方から連絡を頂いた。

そこで、IPCのホームページの過去のパラリンピックを見てみると、確かに、1968年のテルアビブ大会に日本選手が3人出場しておられたことが分かった。このときもウェイトリフティングと言う種目名で、パワーリフティングと言う名称が使われたのは、1992年のソウルパラリンピックからであったようだ。

現在のパラ・パワーリフティング連盟が発足したのは、1999年なので、それ以前は、現在の日本パラリンピック委員会が、ウェイトリフティング（パワーリフティング）の選手を直接派遣していたようだ。

過去から現在に至るまで、名称はことなるものの、パラ・パワーリフティングからパラリンピックに参加した選手名とその結果をまとめてみた。



1968年第3回パラリンピックがイスラエルのテルアビブで開催された。(資料；IPCホームページ)

1968年テルアビブ大会日本選手団（資料；日本障がい者スポーツ協会創立20年史より）



1968 テルアビブパラリンピック

ウェイトリフティング（重量挙げ）――ルールはデッドベンチで現在の挙げ方とは異なる。

3位	フェザー級	南雲米八（長野県）	110 k g
5位	フェザー級	宮澤武利（長野県）	107.5 k g
7位	フェザー級	小嶋敬止（静岡県）	100 k g

1972 ハイデルベルグパラリンピック

ウェイトリフティング（重量挙げ）――ルールはデッドベンチで現在の挙げ方とは異なる。

8位	ライトフェザー級	稲本正雄（愛知県）	85 k g
9位	ライトフェザー級	梅本庄助（和歌山県）	80 k g
5位	フェザー級	伊差幸弘（神奈川）	95 k g

大杉孝志（福井県）、100 m、砲丸とともに重量挙げ出場と記載あり、記録不明

この後20年重量挙げに出た日本選手はいない。

1992 ソウルパラリンピック――以降、ルールは現在の挙げ方。

ここより、パワーリフティングと名称変更

1996 アトランタパラリンピック（連盟発足前につきJ P C 派遣）

10位	82.5 k g 級	大杉隆志（福井県）	160 k g
-----	------------	-----------	---------

1999 当連盟発足

2000 シドニーパラリンピック

15位	75 k g 級	高橋久（宮崎県）	155 k g
-----	----------	----------	---------

2004 アテネパラリンピック

8位	67.5 k g 級	宇城元（愛知県）	147.5 k g
----	------------	----------	-----------

2008 北京パラリンピック

8位	75 k g 級	大堂秀樹（愛知県）	187.5 k g
----	----------	-----------	-----------

2012 ロンドンパラリンピック

9位	48 k g 級	三浦浩（東京）	117 k g
7位	75 k g 級	宇城元（千葉県）	180 k g
6位	82.5 k g 級	大堂秀樹（愛知県）	191 k g

2016 リオパラリンピック

5位	49 k g 級	三浦浩（東京）	126 k g
8位	88 k g 級	大堂秀樹（愛知県）	160 k g
失格	54 k g 級	西崎哲男（大阪府）	

健常者ベンチ（特にシャツ）と障がい者ベンチの違いを明確にしないと、強い指導を受けた戸田選手

5/19-21、イギリスからパラ・パワーリフティング界のトップコーチ、ジョン・エイモス氏を招聘して、合宿を開催。会場は、大分県の別府、亀川にある「太陽の家」。今回は、4月に続く合宿で、この一ヶ月どのような成果が出たか、検証と、今後の7月の競技会までのトレーニングの組み立て方の個別指導を受ける。また、座学では栄養の基礎の基礎を学ぶ。

写真左上は、栄養の基礎（各個人の必要エネルギーはどのように算出されるか、栄養の基本）の講座に、熱心に聞き入る様子。こちらについては、来月号で、内容を詳しく説明します。

写真左下は、太陽の家のトレーニング室。この日は、ジャパンカップに参加する補助団の訓練もあり、福岡県の有志が駆けつけてくれた。補助団は、ジョンから補助の心得指導を受ける。

写真下は、4月合宿で配布されたトレーニングの個別メニューの検証。写真の中嶋選手は、全日本から半年で、10kg以上自己ベストを更新。スティッキングポイント克服するための21トレーニングを実施。（胸で7回、胸から三頭に力が移行するところで7回、全動作を7回）。また、胸式呼吸の習得で、アドレナリンの分泌を促し、選手の試技が安定し、記録が驚くばかりに伸びてきている。

エリさん、連日の通訳ありがとうございました。疲れていないか心配でしたが、頑張る日に自己ベストが出てホッとしました。

